ふるさと御所
文化財探訪

番外編

石光山古墳群〈2〉

文化財課
☎60-1608

6世紀代の石光山古墳群では、木棺直葬（**写真1**）を内部主体とする円墳が数多く築造されました。1基の古墳で複数の埋葬施設を伴う場合には、副次的埋葬施設としては木棺直葬のほか、小形竪穴式石室、竪穴系横口式石室、箱形石棺、埴輪棺（**写真2**）、土器棺など豊富なバリエーションがみられます。石光山古墳群における横穴式石室の採用は6世紀後葉と比較的遅く、調査されたもので4基、現存しているもので1基と少数派です。そして石光山古墳群全体としては、馬具を持つ古墳はむしろ少なく、ミニチュアの鉄製農工具の副葬が目立つという特徴があります。

写真1　石光山50号墳の木棺直葬の埋葬主体
（写真提供：奈良県立橿原考古学研究所）

写真2　石光山41号墳の副次施設としての埴輪棺
（写真提供：奈良県立橿原考古学研究所）

さて、石光山古墳群が群形成をはじめる5世紀後葉といえば、葛城本宗家が滅亡し、朝廷の直轄地としての葛城県に編入される時期に相当します。平成24年2月号では、金剛葛城山系の東麓にはその5世紀後葉に群形成を開始する群集墳が目立つと述べ、小林古墳群を例示していますが、石光山古墳群もまさに同様の事例といえるでしょう。そしてこれら金剛葛城山系東麓の群集墳被葬者は、葛城県そのものの運営に携わった原初的官僚層ではないか、とも推測しました。

一方で、石光山古墳群において興味深いのは、6世紀代のそれぞれ2基の横穴式石室墳と木棺直葬墳が、先行して存在した5世紀後葉の古墳を破壊して築造されていたことです。全国に類例を求めてみると、石光山古墳群と同様にこうした場合、常に、6世紀代の古墳が5世紀代の古墳を破壊して築造している、という共通性が浮かび上がりました。この共通性は偶然とは考えられないことから、同じ群集墳にあっても、5世紀代の古墳の被葬者と6世紀代の古墳の被葬者は、系譜を異にする場合が多いことが分かります。

また、とりわけ奈良盆地内にこうした事例が多くみられることから、大和では他地域にもまして、群集墳被葬者の勢力の入れ替わりが著しかった、ということもできます。つまり、この葛城県の運営に携わったとみられる原初的官僚層たちにあっても、6世紀の初頭にはその構成メンバーに大きな入れ替わりがあったとみて大過ないでしょう。

ところで、石光山古墳群のある独立丘陵の尾根筋東端付近では長径7.5mにおよぶものをはじめ、十数個の巨石が群を成し、重なり合っています。これらは丘陵内にあった自然石が長年の風雨に晒されて露頭したものですが、その景観は**写真3**および**写真4**の通り、一種異様な雰囲気を醸し出しています。こうした自然石の露頭は自然崇拝の対象になりやすく、この石光山の巨石群も古墳時代以来の磐座遺跡となるかも知れません。

写真3（上）・4　石光山における巨石の露頭

【参考文献】
◉奈良県立橿原考古学研究所
『葛城・石光山古墳群』
（『奈良県史跡名勝天然記念物調査報告』第31冊）、1976年
◉拙著『古墳時代の王権と軍事』、
2006年、学生社

（文責　藤田 和尊）